

平成26年度 学校評価総括表 伊丹市立伊丹特別支援学校

教育目標		一人ひとりの自立と社会参加をめざし、たくましく生きる力を育てる						
重点目標		児童生徒の実態を的確に捉え、課題を把握・分析し(R)、計画(P)、実施(D)、評価(C)、改善(A)のサイクルにより、教育内容及び指導方法の工夫改善と研究を積み重ね、子どもたちの持っている力を引き出し、定着させ、より良く広げ・伸ばす教育実践に努める。						
項目		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価
学力の向上	障がいの状態に応じた弾力的な教育課程の編成をする	児童生徒一人ひとりの教育的ニーズ(≠want)に応じた個別の指導計画、個別の教育支援計画を作成し、適切な教育課程を編成する。	自立活動を主とする教育課程、知的障がい教育代替の教育課程、通常教育に準じた教育課程を編成する。 個別の指導計画の内容を学部教員が共通理解し、日々の指導に活かす。 児童生徒の発達段階や教育課題に応じた多様な学習形態の創造。	各学期に全校的に個別の指導計画について話し合う日を設定し児童生徒一人ひとりについて検討する。 個別の指導計画について学部内で相互評価を行い、通知表に活かす。 発達段階や学習課題に応じた学習形態の創造。	A	各学期2回、年間6回の個別の指導計画について共通理解するための学部会を開催した。 6月、11月、2月には評価を行い、通知表に反映させることができた。 学部を超えて「英語学習グループ」、今年度は新たに「生活学習グループ」を実施し、児童生徒の学習意欲の向上に繋がった。	新年度の新しい個別の指導計画作成に参考となるように、3学期末の評価の際に引き継ぎ事項を明記する。 授業改善をしていく意識を持てたか振り返り検証し、学部会で授業内容を見直し、児童生徒の実態に合った教育課程を編成する。	児童生徒それぞれの個別の指導計画を効果的に活用するために、学期ごとの時間を設定した評価、年度終わりの総括、さらに年度の初めの時期での作成といった年間スケジュール中での全教員が見通しを持ち共通理解しており、指導に活かすことができている。 人数が少ない中で、学部を越え、工夫して児童生徒同士が学び合える学習機会を作り、授業を充実させて
	肢体不自由特別支援学校職員としての専門性の向上	PDCAサイクルによるチーム力を活かした授業力の向上。 教員の専門性向上のため、研修・相談・研究を年間を通して継続実施する。 OJTによる教員の資質向上を図る。	学部コーディネーターを中心に、週1回以上の学部会を開催し、児童生徒に関する情報を共有化する。児童生徒の発達段階やICFの視点を取り入れた個別の指導計画の作成。 教員一人ひとりの授業力の向上をテーマにした研究活動。 専門性向上のための研修・課題学習相談の実施。 校内教員が講師となつて行う研修会や教材教具展の開催。	個別の指導計画の作成・活用に関する研修会の実施。 全教員ひとり1回以上の公開授業または研究授業を行い、事後研究を実施。 学習内容や指導の方法について講師の助言を得る課題学習相談の実施。 校内の教員が講師となる研修会を実施。 教材教具展の開催。	A	4月には、提示された事例から指導計画を作るワークショップ形式の研修を、8月には、ICFについての研修とグループ討議を、年間2回の研修を実施した。 全教員ひとり1回の公開(研究)授業を行い、学部や学校全体での検討会を開催する。さらに事後の自主研究会も開催した。 校内の教員が講師となつて、「子どものことばと発達」「水泳指導」等の研修会を6回行った。 教材教具展を5月、11月の2回開催し、20点の教材教具の展示を行った。 校内の教員が研修会講師をしたり、自作の教材教具を見せ合ったりすることにより、学び合う雰囲気が醸成された。	引き続きR-PDAサイクルによる授業力向上に取り組んでいくと共に、今年度Wi-Fi環境が整ったので、情報機器を適切に活用した学習に関する課題学習相談を進める必要がある。	児童生徒の授業記録映像を、学部や自主研究という形で振り返り、授業改善について話し合える風土ができています。また、専門家から積極的に授業改善に向けた助言を受け、エビデンスに基づく指導となるように取り組んでいる。 OJTを活発にすることにより、教員に自らの専門性を高めようとする姿勢が感じられ、資質向上に繋がっている。 ICT機器を積極的に取り入れ、肢体不自由の児童生徒の学ぶ意欲の向上に繋がっている。
	卒業後の進路や生活を見据え自立的に社会に参加する力の育成	各学部における系統的な進路指導の確立。 たくましく豊かに生きようとする意欲を育てる。 自立と社会参加を目指し、充実した人生を送れるよう、一人ひとりに応じた進路選択に対する適切な指導支援を行う。	ライフサイクルを見据えた進路に対する適切な認識を持たせる。 保護者対象の進路説明会の開催とアンケートの実施。 卒業後の生活へスムーズに移行できるよう、関係機関との連絡を密に取る。	保護者進路説明会 アンケートの実施(年間2回) 教職員施設見学 高等部3年生施設体験実習 高等部2年生施設見学会	B	保護者進路説明会を7月に実施し、16名参加があった。 進路アンケート2回実施。 教職員施設見学会(7カ所)、夏季研修会を夏季休業中に実施した。 高等部は、職業学習、体験実習(4カ所)、施設見学(2回)、中学部はトライやるアクションを実施した。 相談支援員とのケース会議3回実施。	今年度より就労継続支援B型事業所の利用条件が厳しくなり、一方で生活介護事業所の数は増えていない。卒業後の進路では日中活動の事業所を決定するだけでなく生活全般にわたる総合的な支援を考える必要がある。また、相談支援員との連携を密にすることが必要である。	福祉の分野では制度が見直しされるなど変化している。研修会や日常的な交流、生徒の実習などで情報交換をしながら児童生徒の将来にわたる適切な支援ができるように取り組んでいる。これからも、関係機関との情報交換を密にし、細やかな進路指導を期待している。
豊かな心	自立活動領域の推進	自立活動領域の健康の保持、心理的な安定、人間関係の形成、環境の把握、身体の動き、コミュニケーション力の育成に必要な知識、技能、態度、習慣を養う。	学識者による個々の児童生徒の課題相談、医師による療育相談、PT・OT・ST等の医療面の専門家との相談を実施し、児童生徒の理解と対応スキルを向上させる。 医療的ケアについての研修や看護師との効果的な連携を図る。 栄養教諭、養護教諭と連携した摂食指導・食育指導の促進。	自立活動について校内教員の共通理解を図るための「自立活動たより」を年間10回発行 OT・PT・ST相談年間27回実施 療育相談年間2回実施 児童生徒の食に関する実態把握調査票を作成し、個に応じた特別調理や摂食指導を行う。	A	自立活動たより 9回発行、OT・PT・ST相談26回実施、療育相談2回実施等、ほぼ計画通り実施し、活用することができた。 医療的ケア委員会による調整・確認は随時行い、実技も交えた夏季研修会の開催や、食育推進委員会による全校児童生徒の実態表の作成・確認等、全校的に共通理解ができるよう実施した。 医療的ケアについては事故なく円滑に進めることができた。	課題相談、療育相談、PT・OT・ST相談等により、具体的な指導の手がかりを得ることができている。しかし、児童生徒の障がいの多様化・重度化の現状により、さらに各教員が相談内容を具体化していくことが必要であり、引き続き、自立活動の指導について、日頃の取り組みを検証しながら、研修・相談を実施していく必要がある	学校全体に自立活動領域の積極的な取り組みの姿勢が伺え、専門家の能動的な活用を図ろうとする思いが伝わってくる。特に、障がいの重い児童生徒の指導内容や方法などの確かな指導ができている。また、医療関係スタッフからの助言を日常の中で活かし、安心・安全への意識やスキルの向上に繋がっている。医療的ケアの必要な児童生徒も、登校から下校バスまでの全ての場面で、看護師と連携が取られ、安心安全な学校生活を送ることができている。

健やかな体	安心・安全な学校生活の推進 豊かな人間関係の形成	児童生徒の通学を保障し、より良い学校生活を送れるよう生活環境を整える。 児童生徒の経験を広め、交流及び共同学習による社会参加を促進する。	通学に関連する関係者及び関係機関との連絡・調整に努め、安全かつ円滑なスクールバス及びタクシーの車両運行計画を作成する。 児童生徒一人ひとりの障がい状況に応じた方法や内容で、交流及び共同学習を推進する。	通学バス・タクシー添乗・介助員との月一回の定期的な業務間連絡会の開催。 小・中学部は居住地交流、学校間交流及び共同学習を進める。 高等部は市内の公立高等学校、近隣の特別支援学校との交流及び共同学習を進める。 こども福祉課と連携し、児童生徒が安心した生活を送れるようにする。	A	スクールバス・タクシーは定時運行を原則に運用することにより、送迎時刻の変更がなく混乱が減った。 児童生徒の実態に応じた交流および共同学習を進めることができた。 交流及び共同学習について、交流のねらい、方法についての共通理解が不十分であったケースが見受けられた。 児童生徒の家庭状況に応じて、こども福祉課相談員と連携して支援を進めることができた。	欠席者の連絡、乗車の有無など、間違いがないように二重、三重にチェックするなどの工夫が必要である。 交流及び共同学習についてのねらいを、交流相手校と共通理解をするための説明資料を交流校の状況に応じて工夫する必要がある。	児童生徒の学校外の生活についても保護者から丁寧に話を聞くなどして、保護者からの信頼も厚い。児童生徒の話し合いに多くの時間を使っているからか教職員同士のまとまりが感じられ、児童生徒の明るい表情や生き生きした活動に繋がっていると思われる。 人数が少ない学校であるが、交流及び共同学習によって、同年齢の児童生徒からの関わりの中で、人と関係を作ることの楽しさや自ら発信する意欲に繋がっている。
開かれ信頼される学校園	学校情報の積極的な発信	積極的に学校からの情報を発信し、動く学校として啓発を図る。	学校ホームページに行事や主な出来事だけでなく、日々の教育活動についても学校紹介を行い、ホームページの積極的に更新を行う。 学校ボランティアを積極的に募る。 地域に向けたフェンス掲示板の活用。	ホームページの更新週1回以上 ボランティアのべ50人以上の参加 フェンス掲示板の更新年間10回 学校説明会・見学会の開催 伊丹特別支援学校ふれあいフェスティバルの開催	A	ホームページ更新H27年2月末現在51回、1ヶ月平均4.6回の更新 校外からのボランティア年間のべ70人 掲示板10回更新 特別支援学校ふれあいフェスティバルに200名が来校	ホームページの更新方法の説明マニュアルを作成し、ホームページの作成が大きな啓発に繋がっていることを意識し、更新できる人材を増やす必要がある。 ボランティアや広報の係を中心に引き続き情報発信に取り組んでいく必要がある。	ホームページの更新が恒常的にあるのでアクセスする人が多いのではないか。市立特別支援学校として、市民からの関心も高いと考えられる。特別支援教育のセンター校として、発信を楽しみにしている。
	一歩進んだセンター的機能の充実	巡回相談、教育相談、サポート教室など、特別支援教育における地域のセンター機能の充実と各事業の円滑な実施。	伊丹市の巡回相談チームの一員として他の機関と連携して巡回支援を行う。 特別支援学校の専門性を発揮し、研修講座、教育相談、サポート教室、各学校園の課題や相談に対して特別支援教育を推進する力量を高めるための学校園等コンサルテーションを実施する。	今年度は3名の教員で各事業に取り組む。 個別的な相談に終わらず、学校園等の特別支援教育の力量を高めるため、学校園等コンサルテーションを進める。 センター事業に関する事後アンケート調査によりニーズを探ると共に、支援に対する満足度75%以上を目指す。	B	巡回相談 56件 のべ121回 学校園等コンサルテーション 11校園 のべ156回 特別支援教育実践講座 14講座のべ436人（総合教育センターとの共催の研修会は含まず） サポート教室 幼稚園5名 小学生6名 ことば 5名 教育相談 47人	学校園等コンサルテーションを今年度新たに幼稚園1園、小学校1校で開始した。相手校へのアンケート調査では、「役に立った」「やや役に立った」を合わせて満足度100%であった。引き続き学校園等コンサルテーションを実施する学校園を増やしていく必要がある。	教職員や保護者からの相談そのものの解決だけではなく、学校全体の特別支援教育を見渡した提案をしようとしていることに、特別支援学校の役割をよく自覚しておられることが伺える。相談している学校自身が解決しなければ前へ進めないことも多々あり、そのような視点でアドバイスをすることが必要である。 また、相談が寄せられるのは、市内の保護者や教職員からの信頼があつてこそだと思うので、活動の質を高めながら広めていって欲しい。

学校関係者評価総括 校長を中心にして職員がまとまり、生き生きとそれぞれの役割を誠実に果たしているからか、学校全体が明るく、暖かい雰囲気を持っている。「子どもたちが行きたい学校」「保護者が行かせたい学校」「先生たちが働きたい学校」という理想的な形になってきているのではと思われる。地域の特別支援学校のセンター校として、様々な場面で、どんどん情報発信して、インクルーシブ教育システムの構築に繋げていってほしい。

次年度に向けた重点的な改善点 今年度の学校経営方針は、「インクルーシブ教育システム構築を踏まえ、説明責任、結果責任を再確認ー RーPDCA サイクルの中でー」とし、起点となるR（Research課題把握・分析）を取り入れたPDCAサイクルを提唱してきた。さらに、学校現場の多様な実践や情報を集約しながらボトムアップしていくインクルーシブ教育システム構築においては、学校の説明責任と結果責任が不変に課せられている。次年度、説明責任と結果責任の理念を背景としながら、既に本校の学校風土として根付きつつある「チーム力」を、風土からシステムへと構築していきたい。そのために、学校内外の連携のあり方について「課題把握・分析」を行い吟味しながら、連携システム構築による相乗効果を高めスパイラルアップを図りたい。

自己評価の基準 A: 目標を上回った B: 目標どおりに達成できた C: 目標をやや下回った D: 目標を大きく下回った